

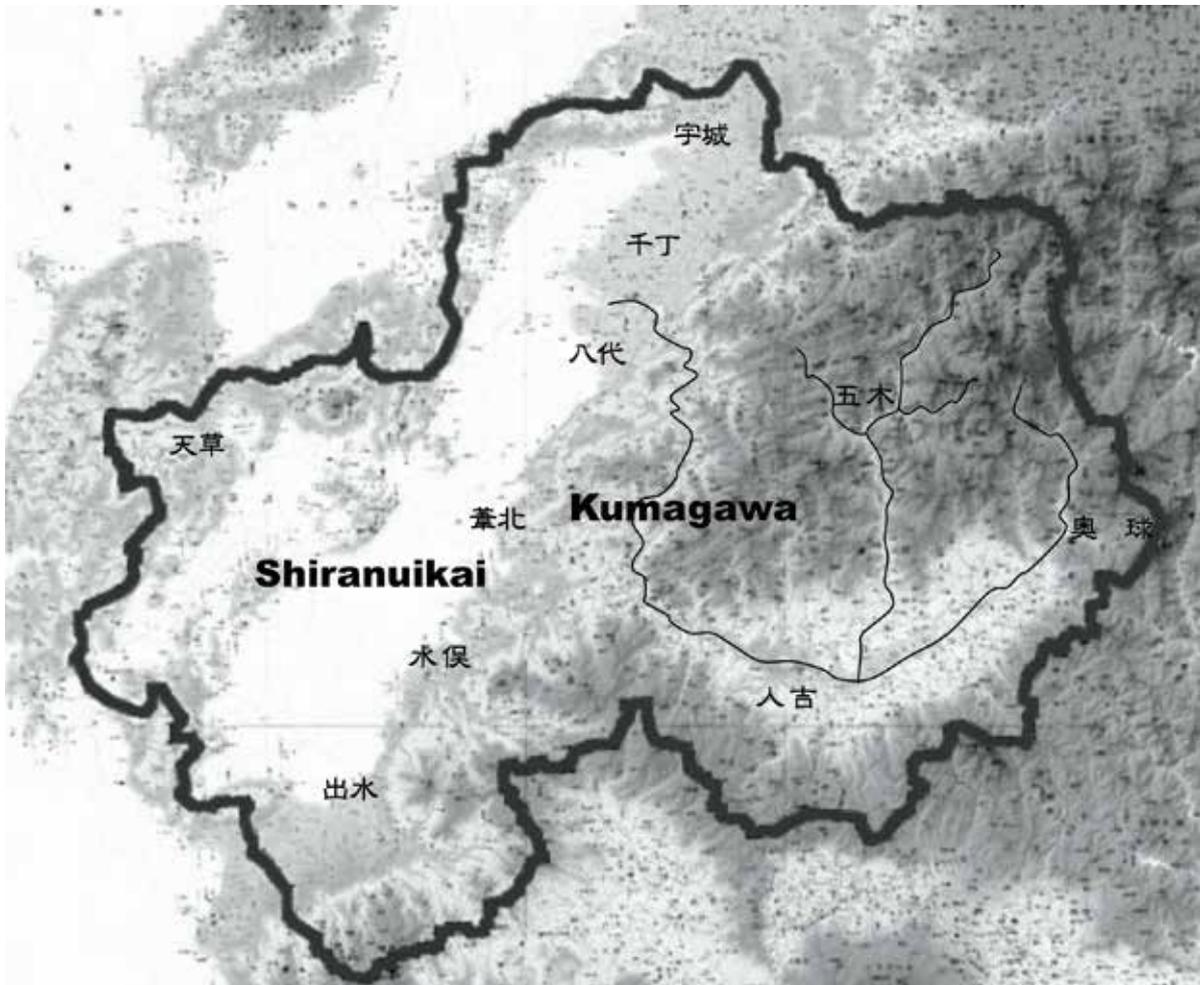
しらぬい くま

第21号

2016年9月

内容

- 平成 28 年度第 2 回現地見学会のご案内
- 平成 28 年度 総会報告
- 平成 28 年度 研究発表会報告
- 平成 28 年度第 1 回 現地見学会天草（松島）を巡る
- フジツボ幼生の飼育は難しかった
- 球磨川を下る～カヌーから見た荒瀬撤去後の球磨川～(上)
- 八代海沿岸の地名⑨ 大矢野
- 球磨川流域の山歩記 第 2 回・国見岳・川辺川源流点
- 「残したい水ものがたり」2016 年度 募集について
- 「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売



不知火海・球磨川流域圏学会事務局

熊本県熊本市南区城南町東阿高 1136-6

Tel & Fax: 0964-26-2003

平成 28 年度第 2 回現地見学会のご案内

4 月 14 日から連続して起こった熊本地震は県内各地に大きな被害をもたらしました。今回の現地見学会では、取り分け被害が集中した地域の一つ、益城町に行き、被災地を見学して活断層と地震被害の位置関係を考えます。地震の教訓が得られる貴重な場所ですが、同時に多くの方が被災された場所ですので住民感情に十分配慮して見学したいと思います。

1 日 時： 平成 28 年 10 月 23 日(日) 開場 9:30 ※小雨決行

2 講師・案内： 下山正一先生(県立大学非常勤講師)

3 日 程：

10:00 室内学習(県立大学北棟 5 階学部会議室) 12:00 昼食(レストランのっぽ)

13:00 益城町巡検(益城町の断層・地質の学習)

4 参加費： 2500 円(昼食代その他)

5 担当者： 堤 裕昭

6 問合せ・ 申込み先：つる 詳子

E-mail tsuru-shoko89314@hiz.bbiq.jp、電話 0965-32-7140

※申込み締切りは 10 月 20 日です。

※野外を安全に歩ける服装、靴でご参加下さい。

《見学予定地》 ※時間の都合で予定が変わることがあります。

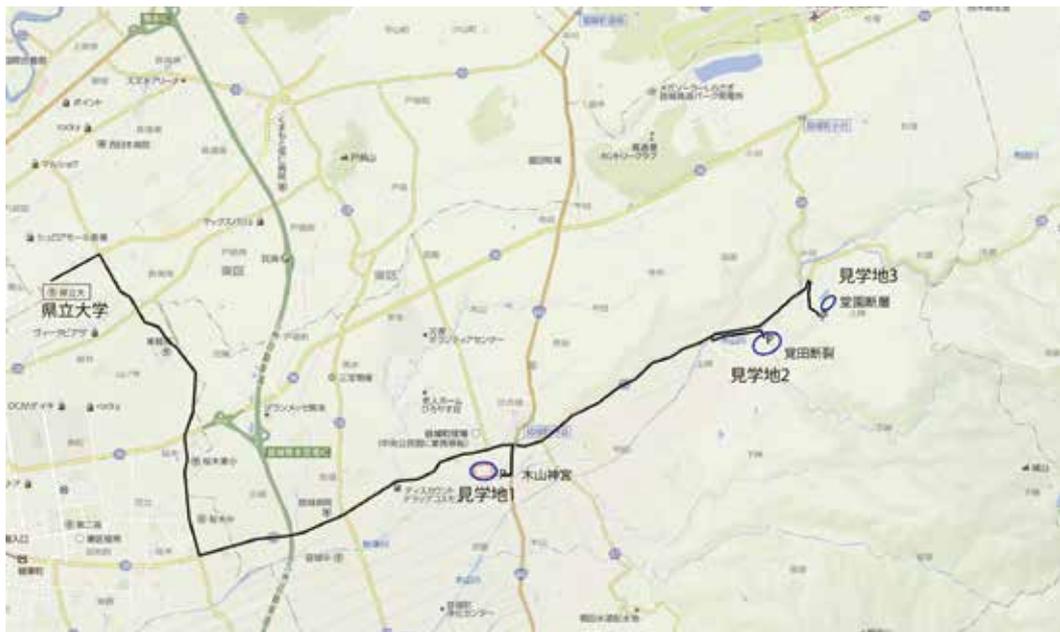
見学地 1) 益城町木山地区の建物被害

2016 年 4 月 16 日未明の M7.3 の大地震が益城町中心地のほぼ真下で起こりました。地下に活断層があり、地形的な段差の位置に家屋被害が集中しました。

見学地 2) 益城町覚田の水田や堤防被害杉の字の亀裂が長く走り、水田、道路、堤防を切り裂きました。

見学地 3) 益城町堂園の地表活断層活断層の最大級のずれ 2m が見られた場所です。

*詳細はチラシをご参照ください



平成 28 年度 総会報告

日時：平成 28 年 6 月 5 日（日）午前 10 時
会場：熊本水産研究センター 1F 研修室
出席者：42 名（出席者 24 名 + 委任状 20 名）



◆総会式次第 司会：正角雅代

- | | |
|------------------------------------|----------------------------|
| 1) 開会 | (副会長) 森山聡之 |
| 2) 会長挨拶 | (会長) 堤 裕昭 |
| 3) 議事 | |
| 1. 議長選出 | |
| 2. 平成 27 年度事業報告
(残したい水ものがたり) | (事務局長) 佐藤伸二・
(副会長) 森山聡之 |
| 3. 平成 27 年度会計報告 | (会計) 坂井米夫 |
| 4. 会計監査報告 | (監査) 沢畑 亨 |
| 5. 役員改正 | |
| 6. 平成 28 年度事業計画案提案
(残したい水ものがたり) | (事務局長) 佐藤伸二
(副会長) 森山聡之 |
| 7. 平成 28 年度予算案提案 | (会計) 坂井米夫 |
| 4) 閉会 | (副会長) 森山聡之 |

◆平成 27 年度事業報告

- ① 平成 27 年度大会
 総会 日時及び会場：6 月 7 日（出席者 28 名 + 委任状 16 名）
 熊本高等専門学校八代キャンパス 1 階合同講義室
 研究発表会 日時及び会場：6 月 7 日
 熊本高等専門学校八代キャンパス 1 階合同講義室
- ② 第 1 回現地見学会 6 月 6 日「八代の城下と日奈久を歩く」（参加者 20 名）
- ③ 第 2 回現地見学会 10 月 24 日「秋の五家荘探訪」（参加者 19 名）
- ④ 事業「残したい水ものがたり」
- ⑤ ニュースレター発行 年 2 回（ 9 月 No. 19、5 月 No. 20）
- ⑥ 学会誌発行：平成 27 年 6 月 vol.9
- ⑦ 理事会開催（6 回）：平成 27 年 8 月 5 日、10 月 4 日、12 月 4 日
 平成 28 年 2 月 29 日、4 月 14 日、5 月 19 日

◆平成 27 年度会計報告（別表）

◆役員改正

前副会長の片野學氏、総務の高橋ユリカ氏、死去のため副会長に時松雅史氏、総務に高平雅由氏に後を引き継いでいただきました。新役員は以下の通りです。（別表）

◆平成 28 年度事業計画

- ① 平成 28 年度大会

平成 28 年度 総会報告

総会 日時及び会場：6月5日

研究発表会 日時及び会場：6月5日

熊本水産研究センター 1F 研修室

- ② 第1回現地見学会 6月4日(土) 天草探訪「天草を巡る」
- ③ 第2回現地見学会 10月24日 「熊本地震 布田川断層巡検」
- ④ 「残したい水ものがたり」一般公募開始
- ⑤ ニュースレター発行 年2回(9月及び4月)
- ⑥ 学会誌発行 平成28年6月末日
- ⑦ 理事会開催 6回/年
- ⑧ 会員拡大 目標130名(平成28年4月25日現在会員90名)

◆平成 28 年度予算 (別表)

不知火海・球磨川流域圏学会平成 28 年・29 年度役員

≪ 理事 ≫

会長	堤 裕昭	熊本県立大学環境共生学部教授
副会長	森山 聡之	福岡工業大学社会環境学部社会環境学科教授
〃	時松 雅史	熊本高等専門学校八代キャンパス教授
事務局長	佐藤 伸二	熊本県文化財保護指導員
会 計	坂井 米夫	環境保全型農業技術研究会

編集(委員長)	森山 聡之	福岡工業大学社会環境学部社会環境学科教授
〃(査読)	高木 正博	宮崎大学農学部准教授
〃	蔵治光一郎	東京大学大学院農学生命科学研究科准教授
〃	入江 博樹	熊本高等専門学校八代キャンパス教授
査読委員	新井 祥穂	東京農工大学農学研究院講師
〃	井上 昭夫	熊本県立大学環境共生学部教授
〃	住吉献太郎	熊本県文化財保護指導員
総務(委員長)	つる 詳子	自然観察指導員熊本県連絡会会長
〃(副委員長)	高平 雅由	熊本大学職員/水俣市立水俣病資料館
〃	上淵 徳光	白髪岳を守る会名誉顧問
〃	大塚 勝海	自営業
〃	小川 滋	九州大学名誉教授
〃	亀井真由美	八代市水産林務課
〃	久保田貴紀	かちやあデザイン一級建築士事務所
〃	佐藤美智恵	
〃	田畑 清霧	東陵高校教諭
〃	高野 茂樹	日本野鳥の会熊本県支部会長
〃	東慶 治郎	環境保全型農業技術研究会
〃	松本 佳久	有機農園ケニアハウス
〃	松本 学	人吉中央出版社

≪ 監事 ≫

監 事	沢畑 亨	水俣愛林館館長
〃	歌岡 宏信	NPO 法人水と緑いきものネットワークくまもと理事長
≪ 顧 問 ≫	大和田紘一	東京大学名誉教授

(アイウエオ順)

平成 28 年度 総会報告

27 年度決算

<収入の部>

名目	内容	金額	備考
個人会費	3000 円 *63	189,000	
団体会費		0	
繰越金		31,541	
雑収入	学会誌	5,500	
発表会		26,000	
剰余金寄付		36,021	利息含む
計		288,062	

<支出の部>

送料ハガキ		24,788	ハガキ寄付あり
学会誌	前年度不足分	54,632	編集含み未払い分
今年度分	100,000	保留	
ニューズレター	2 回	33,286	
事務経費		17,431	チラシ含む
HP 管理費		5,000	
会議費		0	無料会場
借入金返済		50,000	完済
		0	
繰越金		2,925	信用組合+振込口座
計		288,062	

監査 沢畑亨

28 年度予算案

<収入の部>

名目	内容	金額	備考
個人会費	3,000 円 * 90 名	270,000	
団体会費		0	
繰越金		2,925	
雑収入	学会誌・PDF 販売等	20,000	
発表会参加費 / 寄付金		50,000	
計		342,925	

<支出の部>

郵便代	[(90*4) +52] *90 名	32,400	4 回発送+ハガキ寄付
学会誌作成費	印刷	100,000	
学会誌編集費	編集	30,000	
ニューズレター作成	2 回/年	30,000	
事務経費		30,000	コピー、チラシ等
HP 維持費		5,000	
会場費	会場費	20,000	役員会・総会・発表会会場費含
雑費	講師謝礼	10,000	
予備費		85,525	
計		342,925	

平成 28 年度 研究発表会報告

平成 28 年度の研究発表会は 6 月 5 日 (日)、上天草市大矢野町の熊本水産研究センターの研修室をお借りしての開催となりました。ここは、熊本県の水産業に関する研究や試験を行っている施設です。本年度は 4 月 14 日以降、連続して起こった熊本地震の影響で発表者の皆さんの中には、被災者も多く、準備も大変な中、プログラムの変更、一般への広報の遅れなどもあったにもかかわらず、多くの参加者の下、それぞれの研究成果を報告していただき、無事終了することができました。また、昼休みには、施設を案内していただき、より有意義な研究発表会となりました。

それぞれの発表内容につきましては、学会誌次号にて報告させていただく予定です。

◆基調講演 13:00 ~ 14:00

「天草概史 ~ 郡都が福岡から本渡へ~」

平井建治 (天草文化協会副会長)



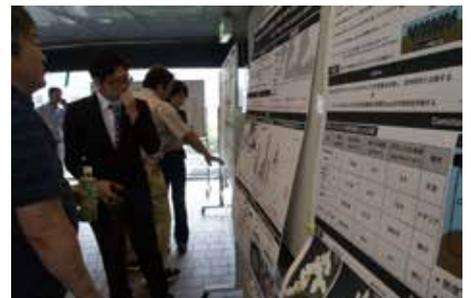
◆研究発表 (口頭発表の部) 14:00 ~ 16:30

- I 「天草のスキューバダイビングについて」
中野誠志 (熊本ダイビングサービスよかよか)
- II 「淡水産アオコ毒素ミクロシスチンによる海域の汚染」
高橋徹 (熊本保健科学大学)
- III 「天草御所浦の化石と地質」
廣瀬浩司 (天草市立御所浦白亜紀資料館)
- IV 「アサリの種苗生産について」
藤芳義裕 (FU バイオカルチャー)
- V 「くまもと里海づくり協会の活動」
城本祐助 (くまもと里海づくり協会)
- VI 「熊本地震の報告とこれから」
森山聡之 (福岡工業大学社会環境学部)



◆研究発表 (ポスター発表の部) 11:00 ~ 12:00 (17:00 まで継続展示)

- I 「竹林の管理は水資源に影響を及ぼすのか？」
永野美穂 (熊本県立大学大学院環境共生学研究科)・井上昭夫 (熊本県立大学環境共生学部)
- II 「三角東港周辺の街並み形成について」
時松雅史 (熊本高等専門学校八代キャンパス)
- III 「八代海に面した佐敷干潟におけるアサリ (*Ruditapes philippinarum*) 個体群の季節変動と稚貝散布実験」
西岡祐玖, 堤 裕昭, 小森田智大, 一宮陸雄 (熊本県大・環境共生),
八里政夫 (芦北漁協), 藤芳義裕 (FU バイオカルチャー)
- IV 「諫早湾における生物 (底生動物・魚類) の分布と食物網構造の特徴」
石松将武, 小森田智大, 堤裕昭 (熊本県大・環境共生)
- V 「緑川河口干潟の生態系」
竹中理佐 (熊本県立大学大学院 環境共生学研究科)
小森田 智大・堤 裕昭 (熊本県立大 環境共生学部)
- VI 「天草栖本町を流れる河内川とその環境」
正角雅代 (天草海部 部長)



平成 28 年度第 1 回 現地見学会天草（松島）を巡る

～クルーズ船で楽しむ天草の島々と天草の生物たち～

八代市水産林務課 亀井真由美

今年は総会前日に現地見学会が開催されるということで、6月4日（土）10時に三角駅近くの三角東港に集合し、現地見学会がスタートしました。昼頃に発表されたのですが、熊本県はこの日梅雨入りし、空の具合を伺いつつ、傘を開いたり閉じたりしながら、大人18名、子供2名の総勢20名で賑やかな見学会となりました。

登立天満宮

最初の見学地は、三角東港から車で15分ほど走ったところにある登立天満宮。駐車場から石の階段を登り、高い場所に位置する、菅原道真公が鎮座する神社です。一般的に、神社には詳しい記録が少ない中、この神社には貴重な記録が残されています。創立は寛永17（1640）年で、創立当時は神社の石段を下った、現在の鳥居の場所にありました。その後、明暦2（1656）年に現在の高台に移されました。神社への階段を登る手前にある、石で造られた立派な鳥居は、宝永2（1705）年の建立で、肥前佐賀郡砥川村の池田清左衛門とその子の新三郎及び山本彦兵衛の3人の石工により作られました。鳥居の上には「菅原神社」と書いてありましたが、金網のような物で保護されていました。もしかしたら、4月の熊本地震で崩れたのかな、と思いましたが、原因はよくわかりません。この鳥居は、「肥前鳥居」とよばれる独特の構造と形態をもつ鳥居です。その構造の特徴は、柱の貫・笠木が二本継ぎ・三本継になっており、天部の笠木と鳥木が一体化し、柱の上部に台輪があり、柱も三本継ぎで太く重厚であるが笠木と貫は薄く、笠木に両端の鼻は流線形に上に向かって「そり」をみせています（登立天満宮の写真参照）。この鳥居の横には、大木があり「舟つなぎの木」と記されていました。かつては、この木のあたりまで海だったそうで、この地は本土と結ぶ交通拠点として栄えたそうです。来航した舟がこの木に繁留されたことにより、この名前が伝わっているとのことでした。その後、とても急な石段の上にある神社へ向かいました。高台の天満宮で手を合わせ、今日の見学会の盛会をお祈りしました。



登立天満宮・宝永2（1705）の鳥居

天草五橋クルージング

シークルーズ船は、昨年7月にオープンしたばかりのリゾート観光施設「リゾラテラス天草」という施設前から出航します。とてもオシャレ建造物で、レストラン、カフェ、バー、お土産屋等がある施設前に、マリソル号というクルーズ船が停泊していました。75名乗りのこの船は、デッキ部分がウッド調で、客室も高級感がある仕様でした。到着後すぐに出発時間になり、船が動き始め、2号橋から5号橋の4つの橋の下を通りました。雨が降ったりやんだりのお天気だったので、プレジャー船や漁船も少なかったのですが、松島の景色を眺めたり、養殖場があつたり、ゆっくりと海を楽しむことができました。普段は乗用車で橋を渡るばかりなので、下から橋を眺める機会は初めてで迫力があり、とてもよい思い出になりました。



昼食

海鮮丼の昼食は、浜んくらというお店でいただきました。午前中の行程も無事終了し、みなさんお腹ペコペコで到着しました。鯛、カンパチ、いくら等の他にも、タチウオ、白ザッコ（ちりめん）など地元の魚がたくさんついていて、食べきれないぐらいのボリュームでした。座敷でくつろぎ、昼からの生物観察前にしっかり腹ごしらえをしました。

永浦島のハクセンシオマネキ

午後からは楽しみにしていたフィールド観察です。永浦島へ到着すると、それぞれ長靴や雨がっぱを着用し、潮がひいた干潟へおりました。干潟へ入ってすぐは、目が慣れずどこを見渡しても何もいないようでしたが、しばらくじっと眺めていると、あちらこちらでチョロチョロと何か動き始めました。干潟上の穴から覗いてはまた穴へ戻り、小さな生物がたくさんいます。名前のハクセン（白扇）のとおり、白いハサミを振りかざしたスナガニ科のカニであるハクセンシオマネキがいました！大きさは思っていたよりも小さく2cm前後の小さなカニです。観察したくて捕まえようとする、すぐに巣穴に入ってしまうので、上淵さんと一緒に巣穴を少し掘ってみました。巣穴はそれほど深くありませんが、なかなか捕まらない中、上淵名人は何匹ものハクセンシオマネキを捕まえ、参加者の皆さんに見せてくださいました。4歳の娘はカニを見ると最初は怖がりでしたが、初めて触る生きたカニにご満悦でした。特にスコップ等の調査道具もない中、シオマネキ以外にも、様々な貝やカニ類を目にすることができ、改めて干潟の生産性の高さを感じた観察会でした。



高杓（たかもく）島の海岸生物観察

永浦島から樋合島へ橋を渡り、車で5分ほどで樋合海水浴場（パールサンビーチ）の駐車場へ到着しました。松島富士や天草富士と呼ばれる高杓島は、干潮時のみ干出するため徒歩で渡ることができる島です。海水浴場に入ると、島までは砂利の道が続き、みなでザクザクと音を立てながら歩きました。約500m程歩くと、島へ到着です。島は140mほどの低い山で、様々な海岸植物に囲まれていました。特にサボテンの花がいつせいに咲きほこり、とてもきれいでした。佐藤先生はぜひ高杓島へ登りたいとおっしゃっていて、1人で頂上まで登られました。結構たいへんな道だったそうで、途中みな心配して待ちましたが、無事に戻られました。また、波打ち際には、何か海藻のようなものが続いていたので、近くへ行くとアマモの群落でした。きっと生物資源が豊かな場所だろうと思いながら見ていると、ちょっと離れた場所で、「タコがいるよ！」という声が聞こえていました。アマモ場にいる餌生物を狙ってタコたちにはよい餌取り場になっているのかもしれない。



高杓島で、今回の現地見学会は無事終了しましたが、翌日の総会と研究発表会に参加する方々は天草泊ということで、夜は懇親会を楽しみました。天草の美味しい魚を頂きながら、それぞれの分野について遅くまで話が尽きず、楽しい時間を過ごしました。



フジツボ幼生の飼育は難しかった

大和田 紘一（不知火海・球磨川流域圏学会前会長）

今回も、東京大学海洋研究所に在職していた頃の話です。私は、海洋研究所の海洋微生物部門の教授をしていました。

微生物は、無限の可能性を持った生物と言われていています。環境の浄化、発酵などを通じて、人類の生活には欠かせない役割を持っています。昨年度のノーベル医学生理学賞を受賞された、北里大学の太田先生は、土壌から分離した微生物が産生する生理活性物質を利用して、アフリカでずっと問題になってきた風土病から患者を救ったとのこと。タイ国から国費留学生として日本にやってきた Chutiwan（チュチワン）と一緒に研究について紹介いたします。

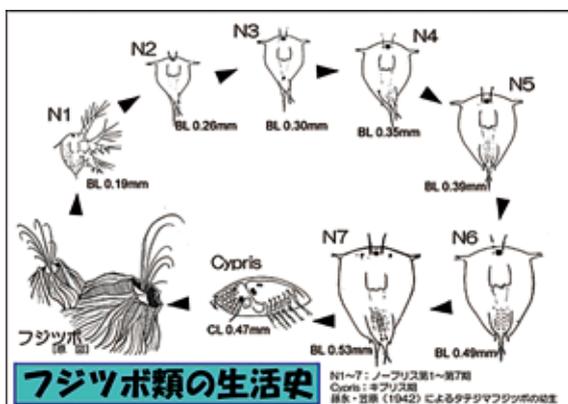
フジツボは、海岸の岩にはいつでも沢山付いている誰でも知っている海岸の生物です。船の底に付着するフジツボやカキなどの生物は、船底汚損生物と呼ばれ、この生物が船の底に付着すると、船の速力や燃費が非常に落ちてしまう困った生物なのです。付着生物の付かない塗料を見つければ、その経済的な効果は絶大なので、世界中の企業が競って研究をしています。チュチワンには、このような生理活性物質を産生する海洋微生物を検索する研究をしてもらいました。第1図にはフジツボの生活史を示しました。実験はタテジマフジツボを使いました。この種は、ふ化した後に、ノープリウス幼生になり、水中の植物プランクトンなどを補食しながら、約1週間でキプリス（Cypris）幼生に変態した後に、最終的な付着点を見つけて、固着するとその一生の間は動くことが出来ナイ生活に入ります。

チュチワンもノープリウス幼生には、培養をした珪藻を餌として与えて飼育していました。それが2-3日の間は元気なのですが、次の日には死んでしまいます。何度やってみても同じ結果でした。彼女も博士課程に入っていて、どうしても結果の欲しい時期でした。どんどん焦りを感じていることがひしひしと感じられたのです。ノープリウスの飼育に外洋の海水をいつも使っていたことに気がついた彼女が、次は沿岸の海水を使いたいというので、東京大学三崎臨海実験所に行って、油壺湾の海水を採取してきました。するとどうでしょう。

ノープリウスは、ずっと元気で、キプリス幼生までの飼育がうまくいくようになりました。私共は、研究航海にいつも出ているので、外洋で海水をポリタンクにくんで、何ヶ月もおいて、熟成海水として、微生物の培地作成に使っていたのです。考えてみれば、フジツボは沿岸に主に住んでいるので、外洋の海水では、生活史を完結させるための何かの成分に欠けていたように感じられます。

こういうこともありました。ノープリウスやキプリス幼生を使った実験がうまくいくようになって、期間内に彼女は学位論文を完成することが出来ました。付着阻害を示す強力な微生物株が得られなかったのは、残念でしたが、めでたく学位記が授与されました。

東京大学では、この年から学位記を英文にして与えるようになりました。これが問題の発端でした。大学院農学生命科学研究科では、従来から農学博士の学位を授与していました。英文の学位記には Doctor of Agriculture と書いてありました。チュチワンは、これを見てこれではタイ国に持って行けないと言ってきました。彼女は、農学の勉強のためにタイ国から派遣されてきたのではなく、海洋生物の研究が目的だったので。大学当局と相談の結果、学術博士、Doctor of Philosophy と表記することで決着し、安心して、故国に帰って頂きました。



第1図 フジツボ類の生活史

球磨川を下る ～カヌーから見た荒瀬撤去後の球磨川～(上)

つる詳子

荒瀬ダムの撤去で、球磨川には蛇行する流れが戻り、白波を立てる瀬やいかにも深そうな淵が出現し、すっかり昔の流れを取り戻しているかのように思える。果たして、実際はどうか、また、この流れは、地域再生の起爆剤として利用するだけの魅力があるのだろうか、などと考えていたら友人の黒岩清隆氏から、カヌーで下りませんか？とお誘いがあったので、二つ返事で「やる」と答えてしまった。黒岩氏は、球磨川を遊び場として育った地元の元川ガキでもある。カヌーといっても、私は初心者同然。二人乗りのラフトカヌーの安全性と、ベテランの黒岩さんの腕を信頼するしかない。コースは、瀬戸石駅の前から深水橋までの、約15km。3時間の予定だ。

瀬戸石駅の前から川に下って行く(写真1)。球磨川最後の船頭となった球磨川八郎さんが2012年まで渡し舟をされていた船付き場がある河原である。この河原のすぐ下流には立岩という巨岩があり、昔は風光明媚な場所で旅館もあり、その周りの竜宮淵はアユの名所でもあった。川の方からみると、その面影は今でも十分に残っている。楮木集落を見上げて写真を撮っていると、ザアザアと激しい波の音が聞こえ始めた。野溜瀬(のだめのせ)だ。ここは、260年前に両側からの山崩れによるせき止め湖決壊による大洪水を起こした、いわゆる“瀬戸石崩れ”を起こした現場で、今でも大小の岩が川の中に多く点在しているところだ。ダム湖に隠れていたが、今は激しい流れも復活している。ここで、最初の球磨川の洗礼を受けた(写真2)。後ろに座っていた黒岩氏はしっかり舵をとってしてくれたのだろうが、激流ほどしっかり漕いだ方がいいよと言われたものの、私はなす術もなく突っ込んだという感じだった。想像以上に波は大きく、早くもずぶ濡れ。この辺りは、瀬でなくても結構流れが速く、櫂の操作もままならぬままに、次の瀬が見えてくる。中津道の市の俣川との合流点にある瀬戸岩の瀬(せどわのせ)には、鬼飛石(写真3)といういくつかの岩が並び、道路からみても、舟で通り抜けるのは困難と思える箇所である。支流からの堆積物も、上から見ると厚みはそう感じないが、下から見ると大きな岩の塊が崖のように立ちはだかっている。「どこを抜けるんだ〜？」とコース取りもできないままに、鬼飛石の岩と岩の間に突っ込み、激しくぶつかり、大きく傾いたと思ったまま、何が起きたか分からいうちに切り抜けていた。「カヌーなら間違いなく反っていたなあ」と黒岩氏がつぶやいた。正直、ひっくり返ると思った。

ホッとする間もなく、右に大きくカーブする箇所に宮の瀬(写真4)がつづいているが、ここは、身構えたものの、まあ、想像通りで楽しむ余裕もあったが、カーブで左に吸い寄せられないよう、後ろの漕ぎ手は大変だったであろうことは想像がついた。この瀬に続くのが、藤の瀬(写真5)で、鎌瀬橋の下を抜けるとすぐのところにある。ここは、昔は筏下りの難所で、川の中にクジラ岩、杣ガ岩などがあり、筏の難破や舟の転覆なども多かったところで、近くには死者の冥福を祈る観音祠もある。昔ほどの激流ではないだろうが、黒岩氏の腕で難なくクリアしていく。また、川の微妙な色の違いや渦の巻き方などで、見えない川底の見方などを教えてもらう余裕もあった。

鎌瀬の集落を見ながら下ると、すぐ鎌瀬の鉄橋(写真6)だ。球磨川第一橋梁と呼ばれるこの鉄橋は、アメリカの技術で作られたトラス橋で、全国でも球磨川でしか見られない珍しいものである。下から見ると、ずっしりとした石造りの橋脚が特にいい。この下流にあるのが鎌瀬(写真7)で、荒瀬ダムが第一段階で最初に水位を下



1 竜神緑(左)と楮木集落



2 野溜瀬



3 鬼飛石



4 宮の瀬と鎌瀬橋



5 藤の瀬

げた時は、この瀬から上流の野溜瀬までが復活したところである。その時の感動を思い出しながら下った。右岸に行徳岩という巨岩があり、昔僧がこの岩で修行をしたという。道路からみても良い岩だが、下からみるとなおさらである。

ここから、葉木橋の下までは穏やかな流れが続く。黒岩氏に漕ぐのを止めてもらい、一人で櫓を漕ぐが、右左に蛇行するどころか、後ろ向きになってしまう。全く上達してない。これでは、協働作業どころか、黒岩氏のかじ取りの邪魔をしていたのではないかと、その後危ない所では、櫓漕ぎは遠慮することにした。小石瀬、湯の瀬を経て、ウメ岩(写真8)を過ぎると鶴の湯旅館の下である。ウメ岩も相当な高さがある巨岩で、下からみると見ごたえがある。

鶴の湯旅館の下に流れ込む小さな滝が温泉であるというので、近づいて触ってみるが、幾分温かいぐらいである。滝の周りには、ヤナギバレイラソウが取り囲むようにして咲き、キレイではあるが、その繁殖力の強さから迷惑雑草とも言われる花は、蘇った球磨川には似つかわしくないように思えた。

ボートハウスと葉木集落を右に、葉木橋が正面に見える(写真9)と間もなく百済来川合流点で、ここで舟を下り休憩。本流と違って、百済来川からくる流れは清く、川底の石もとてもきれいだ。

葉木橋をくぐると、いよいよ荒瀬ダムが近づくが、その前には、球磨川三大瀬と呼ばれた小股瀬(写真10)が待ち構えている。ここまでの下りで、早瀬にも慣れてきたが、近づくにつれ、今までの瀬とは明らかに違うのを感じる。左岸の連続する大きな岩に、ぶつかりそうに引きずられていく感じだ。うわっと思った瞬間、大きな波を全身に浴びて、後ろにひっくり返ってしまった。艇の後ろが低くなっているためになかなか起き上がれない私の後ろで、黒岩氏がケタケタと大声で笑っている。間違いなく、ここは急流球磨川の中の三大急流の一つであると実感した。

ここを抜けるといよいよ荒瀬ダムである(写真11)。・・・続く



6 鎌瀬鉄橋



7 鎌瀬



8 ウメ岩



9 ボートハウスと葉木橋



10 小又瀬



11 荒瀬ダム

八代海沿岸の地名⑨ 大矢野

佐藤伸二

ごく最近まで、大矢野という村が江戸時代にあり、近代になって発展し大矢野町になったと思っていた。江戸時代の記録『天草島鏡』をみると、登立村・中村・上村の3村は大矢野という一つの島にあること、この村に楠甫村・合津村・阿村・教良木村・内野河内村・今泉村を加えた9村を大矢野組というと書かれている。

大矢野は鎌倉時代後期の文書には大屋野と書かれている。もともと島の名前で地域の名にも使われていた。この大矢野組の範囲は、現在の上天草市の範囲とほぼ重なる。

大矢野町は昭和29年(1954)に登立町・湯島村・上村・中村・維和村が合併して成立した。当時最も有力だったのは登立町である。江戸時代にはそれほど有力ではなかった登立村は、明治時代以降に発展した。近代化した三角港との関連が大きいようだ。明治16年(1883)頃から乳牛が飼育され、大正7年(1918)全国三大育成地帯として地域指定を受けた。町制施行は大正13年(1924)である。天草5橋が開通するまでは、登立港は大矢野島の玄関として賑わいを見せた。古い商店街が今も残っている。

大矢野島は天草・島原の乱の首領天草四郎時貞ゆかりの地として知られているが、『蒙古襲来絵巻(竹崎季長絵詞)』を通して知ってい人も多いと思う。この絵巻きは肥後国の御家人、竹崎季長が元寇に際して出陣した戦闘記録で、現在に伝わりその娘が大矢野種基に嫁した時、大矢野家に移った。さらに明治になって大矢野家から明治天皇に献上されたのである。

後巻第16段「敵船に斬り込む竹崎季長と大矢野三兄弟」は歴史の教科書にも出ている。竹崎季長と大矢野三兄弟は一緒に斬り込むのだから、かなり親しかったと思われる。竹崎季長は菊池一族と考えられているが、大矢野氏は上津浦氏や天草氏と同じく大倉姓原田氏の流れ(『天草歴史スペクタクル「天草五人衆サミット」記録報告 島のヒストリア』参照)だから、系統的には近くない。宇城市松橋町の竹崎と大矢野町は八代海北部地域の海上公益を通して、深く結びついていたのではないだろうか。

絵巻には肥全国杵島郡の白石通泰も登場し、竹崎季長を密接にかかわりながら蒙古軍と戦闘している。両者を結びつけたのは大矢野氏だったのだろうか。

大矢野島は八代海沿岸地域と有明海沿岸地域を結びつけ、九州西海岸地域、さらに朝鮮半島や中国大陸へとつながる重要な位置にあった。



登立港：かつて三角港との間に連絡船がかよひ、大矢野島の玄関であった

球磨川流域の山歩記 第2回：国見岳・川辺川源流点

高平 雅由

国見岳は九州脊梁山地のほぼ中央に位置し熊本県最高峰にして市房山、祖母山と並ぶ九州本土屈指の高嶺（標高 1738m）だ。その稜線は熊本県八代市と宮崎県椎葉村の県境をなし、分水嶺を東に下れば耳川から日向灘にそそぎ、西に下れば川辺川から球磨川、そして不知火海へと注ぐ。

今回はその国見岳山頂直下にある川辺川源流点を目指してみた。

コースタイム：8月21日（日）

五勇谷橋ゲート 7:07～新登山口 7:23～山頂 10:00-10:15～川辺川源流点 10:35-11:05～山頂 11:20～新登山口 14:00～五勇谷橋ゲート 14:15

国見岳山頂には新登山口から標高差 800m を登ることになるわけだが、その前にその登山口に至るまでもが九州屈指、とにかく遠くとても八代市に属するとは思えない。

朝 4 時に水俣の我が家を出発。九州自動車道松橋インターを降り、国道 218 号を走って美里町、そこから国道 445 号に入り五箇荘方向へ。曲がりくねった狭い急坂を登ると二本杉展望所だ。そこからさらに車を進めて谷内川沿いに走る。県道 159 号へ左折すると道路に沿って流れているのは川辺川だ。細い道の片側はほぼ垂直な壁。当然反対側は深い谷だ。445 号に入って約 7 km。民宿山女魚荘の手前から今度は縦木林道に入る。舗装、未舗装の悪路を約 10km。地震の影響か道に深い段差が何か所もあり、路肩には崩れた石がごろごろ落ちている。この区間だけで 30 分以上かかってしまった。家を出るときは真っ暗だった空もとっくに開けさわやかな朝だ。が山を登っていると今日は暑くなるだろう。覚悟を決める。

源流点を目指すわけだから本来なら沢を登り詰めるのが筋だろうが、九州屈指の人里離れた辺境の地。先人の登山ログを見てもガイド付きの大人数で入ったものしか出てこない。目的地まで 3 時間近く、渡渉を何度も繰り返し、ロープをよじ登っての高巻きもあるスパルタンなコースのようだ。とても一人で入れる沢ではなさそう。ということで山頂を経由して源流点にたどり着くことにした。

五勇谷橋ゲートに車を止めて林道を歩く。旧登山口の手前で大きな崩落が林道を塞いでいる。谷に落ちないように岩を乗り越えて新登山口へ。ちなみに手前にある旧登山口はもう何年も前から崩れが激しく通行止めとなっている。

新登山口からの標高差 200 m がとにかく急で息が上がる。日頃の不養生が恨めしい。登山道はほぼ尾根伝いで立て札やテープがしっかりとっていて道に迷うことはない。樹高 30m はあろうかと思えるブナ林は国見岳の見所の一つだ。白いまだら模様の太い幹の間を歩いていると、その巨大な存在に圧倒され畏敬の念さえ覚える。



二本杉展望所手前で夜が明けた



五勇谷橋ゲート手前の崩落現場



五勇谷橋ゲート



林道の大規模な崩落現場



見事なブナ林



国見岳の人気者ヒメシャラ8兄弟



新登山口

ブナの他にもヒメシャラやツガ、シナノキなどが群生していて低木層にはスズタケが密生している。

山頂近くになると高い樹高の木はなくなり石灰岩が現れる。下草の中から枯れた幹を立ち上げているのはバケイソウだ。水滴型の実が鈴なりについている。草原をしばらく登ると社が現れ、そこが山頂。360度の大パノラマに市房山や祖母山など九州南部の山並みが広がる。汗だくで登ってきたが、やっぱり晴れの山頂はその価値がある。日曜日だというのに人っ子一人いない。

今日の目的は山頂ではないので一休みして、そこから先はまだ歩いたことのないコースに入る。山歩きでは下りの方が迷い安い。源流点には隣の山に向かう尾根伝いのルートから逸れて広い斜面を下らなければいけない。下りにくい斜面ではないけど踏み跡も目印もほとんどない。iPhoneにダウンロードしてきた先人のGPSログだけが頼りだ。iPhoneとにらめっこで右に左に進路を修正しながら慎重に降りていくと、こんもりと茂った木立の中に源流点を発見。岩の下からちよろちよろと水が染み出している。

岩間に差し込まれた竹筒から滴る水に持参したカップで受けるとステンレスの肌が滴で濡れる。冷たい水を身体に流し込むと汗が噴き出してきた。旨い。汗を拭き一息つくくとセミの声以外は静か。今、この山にいる人間は僕だけだ。そう思うと山が身体にしみこんでくる感覚がある。

この水が沢を下り寄り集まって日本一の清流といわれる川辺川になる。さらに下って球磨川の急流となり不知火海に注ぐのだ。

まだ下山という使命は残しているが、ここで登山の締め、カップラーメンを作ることに。そのために使う水をクッカーに貯める間、川辺川の流が絶たれていることになるのかと思うと申し訳ない気持ちになるが、これは僕の儀式みたいなものだからなんとやめようと言われようとやめるわけにはいかない。

至福の味であった。

儀式を終え、再び山頂を経て無事下山。美里町の佐俣の湯につかり登山を終えた。



山頂手前のブナの倒木



鹿の防護柵



国見岳のシンボル・山頂の社



川辺川源流点



源流点を求めて斜面を下る



儀式ナウ(笑)

「残したい水ものがたり」2016年度 募集について

「残したい水ものがたり」は、不知火海・球磨川流域圏内の将来に残すべき水辺環境を当学会において認定し、水辺の重要性を伝えていこうという事業です。2016年度(平成28年度)の募集中です。ここぞ!と思うお気に入りの場所をじゃんじゃんご推薦ください。2015年度の選定場所について ご覧になりたい方は、学会のホームページまたは、<http://hirokiirie36.wixsite.com/shiranui-kuma> をご覧ください。

[選定の方法 (概要)]

- ・審査員は会員とし、審査員によって構成される審査委員会が行う。
- ・会員及び非会員の推薦、公募、もしくは役員の自薦によって、将来に残したい水辺候補を選出し、審査委員会において、検討を行う。基本的に、現場を確認の上、決定するが、過去学会が実施した現地見学会において催行した水辺は現場確認を省略することも可能とする。
- ・最終決定に至る過程において、当学会で実施する現地見学会、もしくは別途実施される現地の確認作業に参加した審査員、もしくは会員の意見を踏まえることとする。

[候補地の推薦]

- ・自薦・公募の手段、また候補地の審査にあたっては、WEB を積極的に活用する 候補地が多い場合、現地見学会や現地確認だけでは、すべて審査することは困難な場合があるので、「候補」として登録して公表しておく。審査して欲しいという要請は会員が「いいね」を沢山押すような仕組みによって考慮を行う。
- ・希少種が存在する場合は、種名を伏せる(公開しない)などの、配慮する。
- ・国立公園等、公的な保護がなされている場合は重複して認定することはしない。

[公表の方法]

総会で発表と同時に学会の Web ページ による電子地図上で公開する。

[事業の実施回数 (決定日等)]

- ・10月末頃(2016年は熊本地震のため時期が遅くなりました。)
- ・特に多くの要望があった場合は、現地見学会を増やすことを考慮する。これは学会の活性化にも繋げたい。
- ・過去、現地見学会実施済の場合は、総会時プレゼンと投票で決定する。
- ・その他の審議事項については、本事業の審査委員会において検討し決定する

[推薦方法]

推薦者は以下の項目を文書にて審査委員会まで送付してください。

- (1) 名称
- (2) 場所 (できれば緯度経度、または電子地図サービスの URL)
- (3) 推薦者氏名
- (4) 推薦理由(200~400字程度)
- (5) 写真(複数可、できるだけ解像度が高いもの、ご自身で撮影されたもの)

[送付先と締め切り]

〒866-8501 熊本県八代市平山新町2627 熊本高専 入江博樹

e-mail: irie@kumamoto-nct.ac.jp

締め切りは、10月14日(金)です。



「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売

■最新号 vol. 9 No.1 (2015年) 1,000円

- 【原著論文】 球磨川水系川辺川における過去95年間の豊水、平水、低水、渇水比流量の長期変動
..... 蔵治 光一郎
- 【原著論文】 シカメガキ(クマモト・オイスター)養殖の過去・現在・未来 永田 大生
- 【原著論文】 ヒジキ増殖手法の確立と普及に向けた取り組み 長山 公紀
- 【原著論文】 八代海佐敷干潟におけるアサリ個体群の季節変動
..... 徳永 吉宏・原口 浩一・八里 政夫・堤 裕昭・一宮 睦雄
- 【研究ノート】 茶不況期における熊本県の茶生産構造 新井 祥穂
- 【流域いろいろ】 最近の天草でのスキューバダイビング 中野 誠志
- 【平成25年度研究会発表記録】 人吉・球磨のおもしろ考古学 木崎 康弘

■ vol. 8 (2014年) 800円

- 【原著論文】 瀬戸内海の実環境保全と里海をめぐる新たな動き
- 【研究ノート】 塩トマトのおいしさについて
- 【流域いろいろ】 『干潟ベントスフィールド図鑑』の製作と生物多様性を浸透させる取り組み/現在の水俣の海/宇城市松橋町付近の農業用水～大野川流域の溜池～/三角西港の文化的景観調査から
- 【記録】 日本初のダム撤去の現場からの報告 荒瀬ダムのこの1年(4) - 2013年 大きく進んだ本体の撤去工事 - /撤去の現場からみたダム撤去におけるHEP適用の期待と課題
- 【平成24年度研究会発表記録】 宇城市商店街の今昔/「醸造業における自然と健康」 - 松合食品(株)における取り組み -

■ vol. 7 (2013年) 800円

- 【原著論文】 HEPを用いたダム撤去事業における定量的影響評価/球磨川河口域の金剛干拓地先の砂質干潟におけるアサリの棲息を制限する要因
- 【研究ノート】 タケにおける節の役割/八代海におけるクロツラヘラサギ(*Platalea minor*)の越冬状況/底質硬度とアサリ資源量の関係
- 【流域いろいろ】 交通路としての球磨川-人吉八代ルートの成立 - /「干潟生物の市民調査」研修会で育成した人材による八代海ベントス相調査の実施
- 【記録】 日本初のダム撤去の現場からの報告 荒瀬ダムのこの1年(3) - 2012年 撤去工事始まる - /東日本大震災被災農地復興に向けて
- 【平成24年度研究会発表記録】 種山石工の活動

※創刊号 vol. 1 (CD販売のみ), vol. 2 ~ vol. 6 の在庫もあります。

■申込方法: 下記宛に必要部数、お名前、ご住所、送り先をお知らせ下さい。

- ・E-mail: tsuru.shoko@gmail.com (総務: つる 祥子)
 - ・facebook 「不知火海・球磨川流域圏学会」 <https://www.facebook.com/shiranuikuma> のメッセージ欄
- ※10冊以上は、割引サービスがあります。

■お願い: 図書館や公民館など学会誌を購入して下さるところをご紹介下さい。